

2020年の3月から延期を繰り返してきた近現代史ゼミ、やっと今回実施することができました。従来からの内藤講師単独でのゼミは今回が最後になり、次回からは複数講師が交代で実施する形になります。紙幅の関係で概要のみの報告になることをお許しいただきたいと思います。

近現代史ゼミ【第4期 第25回】2022年6月4日の報告

コロナ・パンデミックを機に考える

—「世界の賢人」たちに学びながら—（内藤真治講師）

合衆国のジョンス・ホプキンス大学の発表によれば6月3日午後2時時点で、世界のコロナ感染者数は約5兆3千億人余、死者は629万人余である。パンデミックとは感染症の世界的な大流行のこと。約100年前（1918年～20年）にも、第1次世界大戦の後半と重なる時期、スペイン風邪（インフルエンザ）の世界的な大流行で世界の人口の27%が感染し、第1次大戦の死者をはるかに上回る5千万人以上の死者を出している。

I 新型コロナで何が変わったか

- ドイツの哲学者、マルクス・ガブリエル（1980～）は「ポスト・コロナなどは存在しない」、つまりコロナ後に以前の状態に戻ることはない」と述べている。
- イスラエルの歴史学者、ユヴァル・ノア・ハラリ（1976～）もオンラインのシステムに切り替えた大学が、危機が去った後またもとに戻るとは思えないと述べている。
- 一方で、電気自動車のテスラのCEOで総資産35兆円ともいわれる南アフリカ出身の実業家、イーロン・マスク（1971～）は5月末、社員に送ったメールで全員に週40時間以上のオフィス勤務を要求している。
- 両方向の主張や動きがあり、ポスト・コロナがはたしてどうなるか、分からない。

II 急激なパンデミックの背景とその結果は？

- ネオリベラリズム（新自由主義）=1980年前後からの、市場原理主義を重視、規制緩和や行政の民営化、小さな政府を推進する経済政策。英国のサッチャー（サッチャリズム）、米国のレーガン（レーガノミクス）に代表され、日本では

中曽根康弘（国鉄分割民営化）さらに小泉純一郎（郵政民営化）に続く。国境を越えた資本や人、物の移動を自由化させ、先進国の多国籍企業が世界中に進出し途上国の資源と労働力を搾取、環境破壊をすすめた。（グローバリズム）

- 多国籍企業の例としては、スイスに本社を置く世界最大の食品飲料会社ネスレ（旧ネスル）が東南アジアに進出した時の例、アメリカのチキータ、デルモンテや日本の住商フルーツなどの企業がフィリピンなどのバナナ農場に進出した例、日本が大量に輸入消費しているエビの養殖のため東南アジアのマングローブ林が激減し津波被害を増大させたなどの例がある。
- 本来ならば、限定的な風土病にとどまったはずのコロナが世界中に拡がってパンデミックになったのは、このグローバリズムがその背景にある。
- コロナは様々な対応策（ロックダウン、入国制限や禁止措置）で新自由主義を立ち往生させた。

III 市場主義だけではやっていけない

- インド出身のジャーナリスト、ファリード・ザカリア（1964～）によれば、新自由主義を支持してきた英国のフィナンシャル・タイムズ紙は、従来の保守的な論調を見直し政策転換の必要性を主張するようになった。また、ギャラップ社のアメリカの世論調査では、回答者の43%が「何らかの社会主義」に同意している。
- 過去2回、アメリカ大統領選挙で民主党の子備選挙に立候補して多くの支持を集めたバーニー・サンダース（2人しかいない無所属議員の1人）は北欧型の社会民主主義者であり、特に若い世代に人気がある。

- 『21世紀の資本』(2014)で日本でも有名になったフランスの経済学者、トマ・ピケティ(1971～)は経済格差を生み出す資本主義を批判し、ある種の「社会主義」を主張。
- 今こそ「グリーンニューディール」を
温暖化対策と格差是正を目的とした経済政策。
- ニュージーランドのジャシンダ・アーダーン首相は2020年に週4日労働を提案、海外旅行者の収入に代る国内消費を主張、全体として経済のスローダウンを目指した。
- マルクス・ガブリエル『つながり過ぎた世界の先に』(2021)より
コロンビアの先住民、コギ族の例⇒イギリスでトンネルを通過した時、「マンチェスターに30分早く着くために山を切り崩す」ことの愚かさを指摘。効率優先の資本主義の文明を批判。
《リニアモーターカー(中央新幹線)は?》

IV コロナ以前から日本の政治は…

- 内田樹(1950～、フランス文学者、思想家、神戸女学院大学名誉教授)
「生きていく気がなくなる国(『コロナ後の世界』2021)
日本人は「倫理的インテグリティ(廉直、誠実、高潔)」に価値を見出さない国民だと思われているから、日本は経済力や軍事力があっても敬意を表されることがない。
- 辺見庸(1944～・作家、ジャーナリスト)
「息ができない」(『コロナ時代のパンセ』2021)
見たことのない光景がそう遠くない将来に待っている予感
⇒なぜか?隠れ失業者を含めると、300万人超、実質失業率は戦後最悪の11%台に。
- 高橋純子(1971～、朝日新聞編集委員・論説委員)『『仕方ない帝国』に生きてて楽しい?』(朝日新聞2017・2・19多事奏論)
「現実的たれとは既成事実屈服すること」(丸山眞男・『現代政治の思想と行動』1957)⇒そのように捉えられた現実、容易に「仕方ない」に転化する。現状追認の無限のループ、そんな「仕方ない帝国」に生きてて楽しい?
- 相澤冬樹『安倍官邸VS.NHK—森友事件をスクープした私が辞めた理由—』

NHK記者として森友事件を取材中、担当を外されたためNHKを退職し大阪日日新聞へ、現在はフリージャーナリスト

- 「国境なき記者団」(国際的ジャーナリストの団体、パリに本部)による「報道自由度ランキング」(2002年から毎年発表)によれば、199の国と地域中で、2021年の日本(菅政権)は67位。民主党政権時代は11位～22位だったが、安倍政権以降急落した。
日本が低い理由⇒閉鎖的な記者クラブ制度、特定秘密保護法

V 若者たちが声を上げ、事態が動き出した

- 「全ての県立高校電力を再生エネにして」神奈川県女子高生がネット署名を背景に知事に要請、すでに県立川崎高校では再エネ電力利用の試行が始まっている。
- 「日本若者協議会」の高校生が痲漠対策を求めるネット署名を集め、政府・各党に要請
- インターネットの署名サイト(Change.org)の広報担当者によると、近年は若者の署名活動が活発化している。
- 立命館大学の富永准教授は「若い世代は路上でのデモやストライキではなく、一人で静かに行う運動(オンラインでの社会運動)を好む。」と指摘
- 以前の高校生の「自主活動」には、かなり教師の指導・支援があったと思われるが、昨今の動きにはそれが見られない。完全に若者の間から始まっている。
- 教師の指導・支援があった例
 - ①高知県の高校生
1954年3月1日のビキニ水爆実験で死の灰を浴びたのは焼津漁港の第五福竜丸だけではなく、全国で1000隻以上と言われるが、差別を避けるために公言しなかった。その被災船を高知県の高校生ゼミナールが調査した例
 - ②埼玉県の高校生
戦争中、日本軍(731部隊)の細菌兵器開発のため大量のネズミが地元で飼育されていた事実を埼玉県立庄和高校地理歴史研究部が調べ、中国まで行って発表した。

ゼミ参加者の感想・意見

(感想の全部を掲載できません。ご了解ください。)

○内藤先生は、若者たちに希望を見出し未来を見ている所が素晴らしいと思いました。国産のワクチンも治療薬もない、検査数も少ない、だけどオリンピックはやるという日本の現実を体験して、未来は暗いと思っていた私です。でも、先生のお話を聞いて自分のできるところからやればいいと思いました。そして一首詠みました。

「日本海ミサイル刺さり泣いている地球は怒り震え止まらず」
(上原治子)

○世界報道自由度ランキングが低いと知り、世界幸福度ランキングも非常に低い国だとTVでやっていたのを思い返しました。コロナで可哀そうなのは生徒・学生だと思います。修学旅行や行事もなくなり、授業はパソコンでリモート、キャンパスライフなどない、友人との交流もない学生生活など味気ないものです。そんな中、若者たちが声を上げだしたのは心強いと思いました。(S, N)

○久々に内藤先生の話が聞けて良かったです。TBSTVのサンデーモーニングは数年前から毎回録画して観ています。高橋純子さんも出演の時は良い話を聞けて楽しみにしています。プーチン(ロシア)のしていることは、80年前の日本のしたことと同じだと私も身近な人には話したりしていますが、娘や孫など若い人にどう話せば理解してもらえるのか…苦慮しています。(匿名希望)

○高校勤務です。新聞もTV報道番組もほとんど目にしない生徒たちですが、ウクライナへのロシアの軍事侵攻の問題は関心が高いです。4月の授業のスタート時には、まずウクライナ問題をとりあげ解説をしました。生徒の情報源はネットのツイッター、インスタです。一瞬の切り取られた場面には目を向けて、一時的な感情の高まりはありますが、そこから、歴史的・政治的な背景まで深めるためには、授業の場での手助けが必要だと考えています。日本はもっと他国からの攻撃に備えて防衛強化すべきだと考える若者には、それでいいのか、それが解決方法としてベストなのかと問い、話し合う必要があると思います。

コロナ禍で正解のない問題に日々向き合う社会では、「しかたない」であきらめず、どうしたらいいか考え続ける、考え続けさせる教師でありたいと思いました。(田口有理)

○学校や職場で民主主義が教えられていない、育てられていないということが「時の政権につく者の言うことが現実」という論調につながっているのだと思った。しかし、コロナパンデミックによって格差社会の現実も明らかになってきた。その一つが女性の生理の問題や英検の受験料の高額問題などで、身近な事に若者が目を向けていることには何か展望も感じる。(須田章七郎)

○久しぶりのゼミを楽しみにしていました。内藤先生の力強いお話に引き込まれました。「仕方ない」ではなく、関心を持ち本当のことを見抜く賢さを身につけなくてはと思いました。(須田智子)

○講義冒頭の「資本主義」の話で、資本側は「労働力を買って富を得る」、新自由主義は「儲からなくてはダメ」という考え方、グローバリズムは「利益を求めて世界各国へ」、と私の疑問である「富」って何?に大いに答えてもらえました。講義後の私の質問に、マルクス・ガブリエルの「人間も自然の一部」ということを引き、「発想の転換を」、「足るを知る」と内藤さんから提示をいただきましたが、共感をする所です。ただ、利潤追求で成長、発展を重ねてきた人間にそれは可能なのか、心配になる所です。

ちょうど内藤さんの講義の前の上毛新聞(5/20)にマルクス・ガブリエルの記事が載っていて、自分の今までの人間と社会に対する思い込みをズバリ指摘されているような気がしていた所、内藤講義の冒頭でいきなりマルクス・ガブリエルの引用から始まり驚きました。我々は様々な錯覚にとらわれていると彼は指摘し、「私たちの問題の解決には、目の前の困難について完全にリアルに理解すること、つまり錯覚やイデオロギーにとらわれないことが必要なのだ」と締めくくっていますが、そのために近ゼミもあるし、原発部会もやる意味があるかな、非常勤も生徒と一緒にリアルに考えていく良い機会かなと、改めて想いを強くした次第です。(坂田尚之)

一文責・設楽春樹一